

最終試験の結果の要旨

報告番号	保研 第 29 号		氏名	富田 浩紀
審査委員	主査	窪田 正大	副査	木山 良二
	副査	大重 匡		
	副査	根路銘 安仁		

主査及び副査の5名は、令和4年8月3日17時から18時にかけて学位請求者 富田浩紀に対し、論文の内容について質疑応答を行うと共に、関連事項について試問を行った。
 具体的には、以下のような質疑応答がなされ、いずれについても満足できる回答を得ることができた。

質問1) 重要な活動の特徴の結果は先行研究と同じような結果であったのか。

(回答) 重要な活動の性差や年代をみた研究では、女性は家庭生活、男性は趣味と仕事が有意に多く選択されており、重要な活動を運転状況でみた研究では、運転群は仕事・教育を、運転中止群では家庭生活を有意に選択されていた。重要な活動を満足度の高低で比較した本研究においては、先行研究と同様に趣味、家庭生活が多い傾向であったが、差は認められなかった。

質問2) ロジスティック回帰分析について調整モデル1では抑うつ傾向、モデル2では年齢が関連しているがこの結果をどのように捉えているか。

(回答) 調整モデル1に対して調整モデル2で交絡因子に教育歴と性別、年齢を増やしたことで、抑うつの影響が消えたのは抑うつがこれらの因子と関連していた可能性がある。最終的に潜在的な共変量後に社会的フレイルと年齢が重要な活動と関連したと考える。

質問3) 重要とする活動と抑うつはどちらの因子が影響しているのか。

(回答) 因果関係は明確にすることはできていないので、今後、縦断研究で明らかにできればと考えている。

質問4) 満足度と抑うつに関する先行研究があるのか。

(回答) 具体的な目標設定を行うと生活満足度があがるといった先行研究がある。満足度を高めることで抑うつに良い影響を与える可能性があると考えている。

質問5) 役割の重要性について指摘されているが、今回の研究では領域に差がないがどのように考えているか。

(回答) 活動の満足度によって領域に差はなかったが、活動の満足度が低いと抑うつの割合が高いことが本研究で示されている。先行研究では、社会的な活動制限や、役割の満足度が低いと精神的健康と関連することが明らかとなっている。したがって、社会的活動や役割を維持するためにも個人が重要な活動に従事し、満足度を高めることが大切だと考える。

質問6) 重要な活動の特徴を明らかにすることが目的となっているが、活動に差はなかったことに対してのどのように考えているのか。

(回答) 重要な活動の満足度の高低によって高齢者の重要な活動に影響は与えないことを示唆している。高齢者が重要としている活動のカテゴリーのフレイルの各領域における重要な活動についての調査では、各フレイルに応じて重要な活動が影響されることが明らかとなったが、活動の満足度や遂行度には全てのカテゴリーで差が出なかったとの報告がある。本研究の満足度については、最も重要な活動の高低のみで判断しているため、影響を与える可能性がある心身の状況を含み、総合的に評価する必要があると考える。

質問7) 今回の研究の新規性はどのようなものになるのか。

(回答) 地域在住高齢者の大規模集団における重要な活動の満足度によって活動カテゴリーを検証したこと、また活動の満足度が低いと社会的フレイルや抑うつ割合が高くなる可能性があることが示された点である。

質問8) ADOCの満足度で2群に分けているが、従来から4と5は高満足、4以下は低満足として分類されているのか。

(回答) ADOCについては活動の満足度を5段階でランク付けするもので、全体では4、5と回答したものが圧倒的に多かった。先行研究を参考に操作的に4、5を高満足群、4以下を低満足に分類した。

質問9) これまでの研究でも4、5が多くて3以下が少ないのか。

(回答) 最も重要な活動の満足度の高低で分類した論文はないが、満足度の分類については今後も慎重に検討していきたい。

質問10) 研究の限界でも述べられているが、鹿児島市や熊本市で実施した場合は今回の結果は変わる可能性があるのか。

(回答) 実施する場所の地理的特性や公共交通機関の整備の程度等によって差があるため、重要な活動や社会的フレイルの有病率など異なると考えている。都市部や過疎地域など複数のデータ収集が必要だと考える。

質問11) 抑うつの割合は占めているが、平均値、中央値などは分析しているのか。

(回答) 今回は、カットオフ値を用いての分析のみ実施した。

質問12) 重要な活動の中で趣味が多い傾向にあったが、そのなかでも特徴があるのか。

(回答) スライドにはカテゴリー別のみ示したが、全体では趣味の園芸が多く、男性は園芸に加え釣り、女性は園芸に加え手工芸を選択する人が多い傾向であった。

質問13) 縦断的研究をどのように考えているのか。

(回答) 本研究は、新型コロナウイルスの発生前の2019年のデータであり、1年後でも重要な活動や活動の満足度も変化が生じ心身の影響があると考えられる。現在もお新型コロナウイルスは収束していないが、2～3年後の重要な活動の満足度を維持できている人とそうでない人に分け、社会的フレイルを含む心身の影響を調べ、新たにQOLや自己肯定感などの評価を加えた心理面の影響も検討したい。

質問14) 活動カテゴリーに差はなかったが、どのような結果になると予測していたのか。

(回答) これまでの先行研究に類似した趣味、対人交流、社会参加等で差が出るかもしれないと予測していたが、活動の満足度の高低によって差は出なかった。

質問15) ADOCはディスプレイ上に絵が出るため選びやすい反面、説明バイアスがかからないよう工夫した点があるか。

(回答) 「あなたが重要としている活動はなんですか」と問うこととした。また、各カテゴリーの画像を見せながら「この画面に具体的な大切な作業ありますか?」と問うことに加え、重要な活動の聴取方法に関する事前講義を受けた。

質問16) 考察の中で文化、地域的な影響を受けると述べているが、垂水の特性があるのか。

(回答) 本研究においては活動に差はなかったが、重要な活動の性差や年代別での調査では女性は家庭生活の中でも炊事、男性は趣味の中でも園芸が最も多かった。年代別では80歳代の社会活動は墓参りが顕著に多く選択されており、地域特性を示すものである。

質問17) 対象者の職業は、農業、養殖業などが多いのか。

(回答) 対象者の職業等については、聴取していない。

質問18) この結果から作業療法にどのように活かしていくのか。

(回答) 今回はADOCを用いて個人が重要とする活動を特定した。よって、これらの情報をもとに個人が重要とする活動を知り、その活動を継続していくこと、また目標設定を具体的に行い、専門家からのフィードバックや賞賛などを得るなど、活動の満足度を高めることができるような支援の方法論を考えていきたい。

以上の結果から、5名の審査委員は本人が大学院博士課程修了者としての学力と識見を十分に具備しているものと判断し、博士(保健学)の学位を与えるに足る資格をもつものと認めた。